

楽曲分析を用いた「よさこい」音楽の印象評価研究

Impression Evaluation of Yosakoi Music using Music Analysis

1W130030-7 石井 佳奈梨 指導教員 菅野 由弘 教授

ISHII Kanari

Prof. KANNO Yoshihiro

概要：本研究は、よさこい節を用いた印象評価実験と楽曲分析を通して、人間が音楽を聴くときにその音楽についての経験や知識と受ける印象の関係を考察し、音楽の印象評価の新たなあり方を追求するものである。同一の旋律を持つよさこいの音楽を実験音源として使用し、実験参加者をよさこいに関する経験・知識によって群分けをすることで、より限定した印象評価の比較を目指した。分析の結果、よさこいの音楽について、よさこいの経験の有無によって音楽から受ける印象は異なることが分かった。また、同一の旋律にアレンジを加えることで表現する楽曲意図の伝わりやすさは、楽曲の特色によって2つのパターンに分類できることが明らかになった。本研究では、実験結果に加えて楽曲分析を行うことで、音源に含まれる楽器の音色から影響される印象や、よさこいの経験が音楽の受聴に与える影響を多角的に論じている。

キーワード：印象評価、楽曲分析、音色、よさこい

Keywords: impression evaluation, music analysis, tone, Yosakoi

1. 序論

本研究は、「よさこい」の音源を実験刺激として用いた印象評価実験と楽曲分析による、音楽印象評価研究である。

音色の評価に関する既知の研究では、音色の多様性を体系化し分類するべく心理尺度評価実験などによる音色表現語の探索が行われてきた。多種の音に対して表現語を用いた実験と多変量解析による分析がなされている研究は多くある。しかし、受聴者の印象に着目するものが多く、音楽の意図に焦点をあてたものは少ない。本研究では、印象評価実験と楽曲分析を併せて論じ、音楽の印象評価の新たなあり方を追究することを目的とした。

また、実験音源として「よさこい」の音楽に着目した。高知県発祥のよさこいは楽曲、衣装、チームや祭りが持つ地域性といった複合的な要素を持つジャンルである。楽曲には民謡「よさこい節」のフレーズが取り入れられており、歌詞を含め数多くのアレンジ版が存在する。本研究では、実験音源

としてよさこい楽曲からよさこい節の同一旋律部分を用いることで、より限定した印象評価の比較を行うことができると考えた。さらに実験参加者を、よさこいを踊った経験の有無によって群分けすることで、使用楽曲についての知識レベル分けを明確にすることを図った。

以上より本研究では、第一仮説「経験の有無によって、人間は音楽に対し異なる印象を抱く」、第二仮説「同一の旋律にアレンジを加え、異なる意図を的確に伝えることは難しい」という2つの仮説を立て、実験・検証、分析を行った。

2. 印象評価実験と楽曲分析

音源印象評価実験として、よさこいの音源を参加者に聴かせて楽曲の印象を回答してもらう個別自記入形式の質問紙調査を実施した。実験音源17曲に対し、評定尺度法とSD法によって「日本」「西洋風」「人工—自然」「単純—複雑」など17問の回答を求めた。また印象評価実験結果をより詳しく

考察するため、全17実験音源の資料分析を行った。楽器構成分析などに加え、本論文では制作時の資料をもとに、楽曲背景・意図を調査、解説を述べている。

本実験ではよさこいを踊った経験がある参加者をA群、ない群をB群とした。実験結果は2要因混合計画分散分析によって解析し、群間の差が有意であった場合には事後検定として多重比較(Holm法)を行った。

4. 結果と考察

全17音源のうち、1問以上で分散分析によって2群間の差が有意であると認められたのは14音源であった。よさこいを踊った経験があるA群と、よさこいについて知らないB群には印象評価に差があることが判明した。群間に差が認められなかった3曲は楽曲構成がシンプルという点で共通していた。また、楽曲意図に沿った印象を適切に伝えられたかについては2つの楽曲パターンに結果を分類できた。「ストーリー性が強い楽曲」では背景を知らない人は楽器の音色や音の構成に印象を左右されやすいと判明した。「世界観が強い楽曲」では同一の旋律にアレンジを加えることで異なる印象を伝えやすいことが分かった。

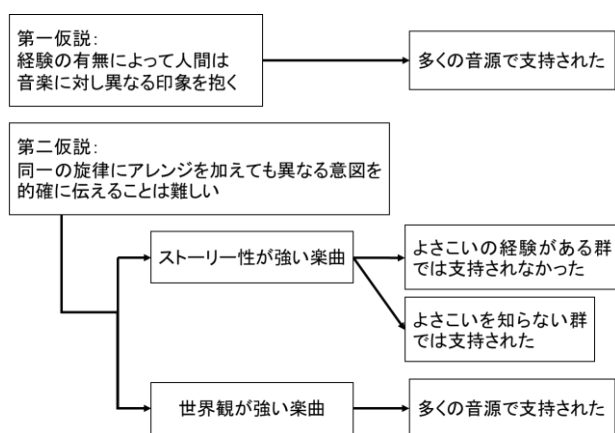


図2 仮説の検証結果

仮説の検証とともに多角的な考察を4点行った。第1に、印象評価実験で使用した表現語には多次元の意味があり、本実験で設定した「日本」

のキーワードには、古典的側面と現代的側面があることが分かった。第2に、くり返し音源の比較では、転調と音色の変化についてそれぞれ印象に与える影響を考察した。どちらにおいても特によさこいを知らない群で音の構成や音色に影響されやすいことが判明し、転調では主音の高さが、音色の変化ではリズム音の構成が変化の要因であることが明らかになった。第3に、「単純—複雑」の判断基準を論じ、よさこい経験があるA群は振付の知識に関わらず踊るための音楽としてよさこいの音楽を聴いていることが分かった。また、B群が耳慣れない音色を「複雑」と回答したことから、楽曲の構成だけでなく、音色についての経験や知識が「単純—複雑」の判断に変化を及ぼすことが判明した。第4に、日本の伝統楽器である箏の音色に着目した。よさこいを知らないB群は、箏の音色が含まれる音源で「古典」の印象を受けていないことが分かった。

5. 結論

本研究では、印象評価実験結果に加えて楽曲分析結果を考察することで、各音源の印象を結論付けるだけでなく、音源に含まれる楽器の音色から影響される印象や、よさこいの経験が音楽の受聴に与える影響を多角的に論じた。この結果は、よさこいの経験、よさこいの音楽に限らず、多くの音楽印象評価研究に通じるものだと考えられる。

参考文献

- [1]岩宮眞一郎・大橋心耳(1997). 音の感性を育てる 聴能形成の理論と実際 音楽之友社 p. 35-34.
- [2]中井未生・三石大(2004). 楽曲フレーズに対する印象評価の個人差の分析 教育情報学研究 第2号 p. 111.
- [3]エバンズ ベンジャミン ルカ・棟方渚・小野哲雄(2014). 作曲家意図とリスナーの特性による楽曲印象の比較 情報処理学会研究報告 第114巻73号 p. 53.